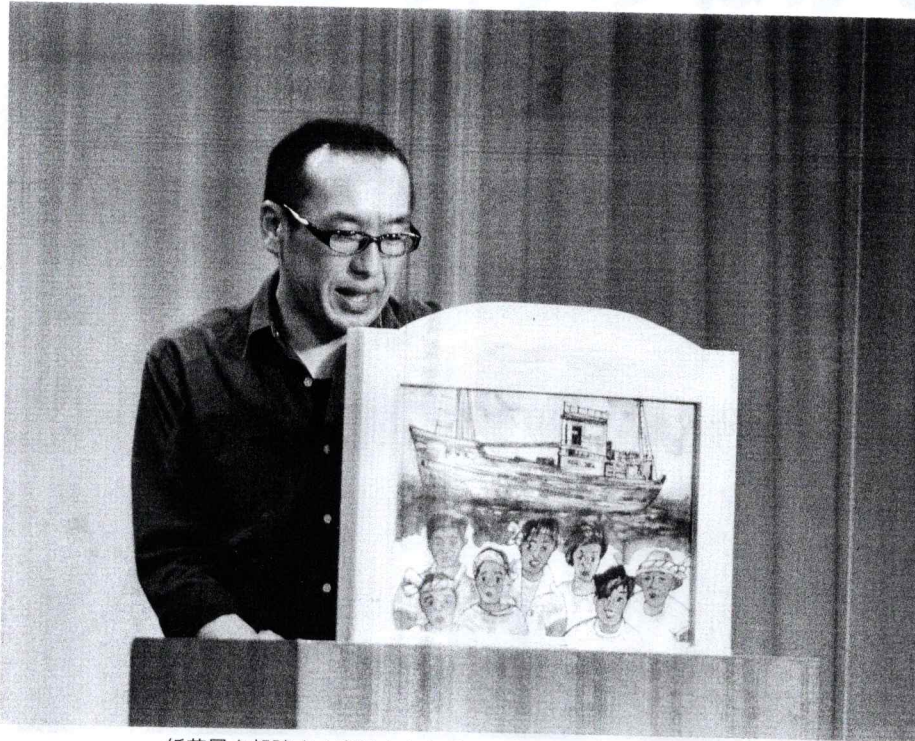


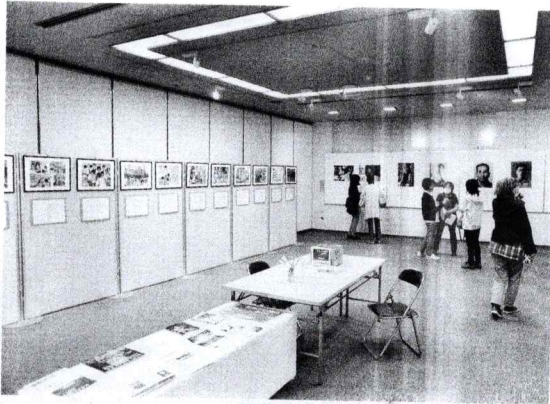
ビキニの海のねがい

紙芝居を上演



紙芝居を朗読する宮川さん(4月4日、高知市立自由民権記念館)

アメリカの水爆実験により多くのマゲ口漁船員たちが、死の灰をかぶり被曝し、たビキニ事件の真相を次世代に語り継いでいくた



原画展会場

めのツールとして紙芝居「ビキニの海のねがい」がこのほど完成。4日には高知市内で紙芝居の上演会と語り合う集まりが持たれました。「ビキニの海のねがい」の原画は県展無鑑査の画家・森本忠彦さんの作品。全16枚で約20分間の上演時間になります。

高知市立自由民権記念館民権ホールで取り組まれた上演会では、小学校教員で劇団員の宮川真幸さん(38)が朗読。ビキニ事件の概要、元船員の証言にもとづく被災時の様子やその後の人生、高知市の活動で封印されていた事件の真相が解きほぐされていく経過などの語りが、森本さんの原画と組み合わせられコンパクトにまとめられています。上演会には被災船員の遺族も参加し、故増本和馬さんの妻・美保さんは「事件を子どもたちに引き継いでいくために、紙芝居を作ってくれたことは本当にありがたい」とコメントしました。

上演を終えた宮川さんは「今日は遺族の方が見に来てくださったのでとても緊張しました。はじめのうちは間違わないように読

まなければという気持ちでしたが、何度も読んでいくうちに被災船員の方の人生の重さと生き様が、だんだん分かってきました。紙芝居は演劇と同じで観客の息遣いが伝わる。会場の反応で学ばされることも多くありました」と話しました。

同自由民権記念館では紙芝居の原画やビキニ事件の関連資料を展示する原画展(4月2日から8日まで)も取り組まれました。紙芝居を鑑賞した40代女性の話 歴史を伝えていくためのメディアを作ってくれたことは本当に素晴らしい。今度は私たちがこの紙芝居を使い、歴史を子どもたちにつないでいく役割を担っていかなくてはならないと思う。